

論文の内容の要旨

論文題目 金春禅竹の能楽論研究—荒神をめぐる思想と六輪一露説

氏名 高橋 悠介

金春禅竹（1405～1470年前後）は、世阿弥の娘婿として世阿弥から能楽論を伝授され、それをふまえる一方で、世阿弥とは対照的な能楽論を生み出し、作品においても独自の地平を切り開いた。本論文は、主に二つのテーマから、そうした禅竹の思想の特質とその背景を明らかにするものである。

一つは、禅竹の『明宿集』において論じられている芸能神としての翁の問題で、荒神という神の性格からこの問題に迫ったのがⅡ「猿楽の神としての翁と荒神」・Ⅲ「円満井座の伝承と禅竹の信仰の諸相」である。もう一つは、禅竹が生涯を通じて展開させていった「六輪一露説」といわれる図像を伴った能楽論体系の問題で、これはⅣ「六輪一露」という表象」において詳しく論じた。

以下、論文の構成と各章の概要について述べたい。

○論文の構成

I はじめに—金春禅竹研究の現在

II 猿楽の神としての翁と荒神

第一章 猿楽と翁／荒神信仰

第二章 荒神の縁起と祭祀

第三章 室町期南都における荒神

第四章 『明宿集』の世界と荒神

III 円満井座の伝承と禅竹の信仰の諸相

第五章 円満井座の舍利について

第六章 円満井座の御影について

第七章 猿楽起源説の周辺と律宗

IV 「六輪一露」という表象

第八章 世阿弥から禅竹へ一禅の問題を中心に

第九章 円相と利釦

第十章 六輪一露説における志玉加注とその構造

第十一章 六輪一露説と一心三観

第十二章 禅竹能楽論における「一露」と華嚴学

第十三章 禅竹能楽論における「一露」と胎生学

V おわりに

VI 参考文献表

○論文の概要

I 「はじめに一金春禅竹研究の現在」では、今日までの金春禅竹研究を概観しつつ、本論文がどのような観点に立つものかを示した。

II 「猿楽の神としての翁と荒神」

ここでは、日本で独自に展開した習合的色彩の強い神、「荒神」が禅竹の翁信仰と密接に関わることに注目し、「荒神」を禅竹の能楽論や思想を考える上での鍵となる概念と位置づけ、分析した。

第一章「猿楽と翁／荒神信仰」では、猿楽の芸能神信仰に関して、これまで摩多羅神の問題が多く議論されてきた現状に対し、実際に禅竹の伝書『明宿集』などにみえる荒神の問題を考える必要性を提唱した。さらに、猿楽が荒神信仰を持つに至った背景として、猿楽が神社の遷宮などにおける結界鎮壇の呪術「方堅」に関与していた一方、造営や遷宮に際しての結界儀礼には荒神供や荒神祓が行われていたことを重視した。

第二章「荒神の縁起と祭祀」。世阿弥・禅竹の記す猿楽起源説において、芸祖、秦河勝は大荒神となったとされ、禅竹も荒神を信仰していたが、中世における荒神の性格はこれまで不明な点が多かった。本章では、日本で生まれた習合的色彩の強い神格「荒神」の生成と歴史的展開をみた上で、鎌倉後期に荒神に関する縁起・教説を集成した『荒神縁起』と

いうテキストを分析することにより、荒神をめぐる靈験説話の背景、寺社縁起との関わりなどを考察した。如来荒神の図像が金剛薩埵の図像と類似していることについても、『瑜祇経』注釈との関わりを指摘した。

第三章「室町期南都における荒神」では、大和猿楽に縁深い多武峰・春日社・興福寺において室町時代、荒神の信仰がどのように展開していたかをみた上で、長谷寺の奥にある笠山の荒神の縁起説を分析し、秦河勝が泊瀬川から湧出したとする猿楽起源説との関わりにもふれた。

第四章『明宿集』の世界と荒神」は、荒神が持っていた二面性（二相一如論）や、胞衣神、根源神としての性格などが、禅竹の『明宿集』に描かれる翁・宿神のあり方に影響を与えていることを論じた。その中で、『法華経』法師品の「柔和忍辱衣」という句を荒神と関係づける注釈言説を、禅竹が受容していたことなどを明らかにした。

III 「円満井座の伝承と禅竹の信仰の諸相」

禅竹は円満井座において、毎月一日に翁面と宿神の御影をかけ、十五日に舍利礼を行い、荒神の縁日である二十八日に鬼面を供養していた。この御影・仏舍利・鬼面は円満井座の三宝と位置づけられており、こうした宝物をめぐる座の伝承や禅竹の思想を分析した。

第五章「円満井座の舍利について」。金春禅竹が属していた円満井座の宝物・仏舍利については、秦河勝が守屋合戦の功により聖徳太子から賜わった、という由来譚があるが、この伝承には河内の律宗寺院・教興寺の舍利をめぐる言説の影響が指摘できる。また、禅竹が引く舍利に関する句が、舍利・神明一体説の思想的根拠として流通していた様相を示し、禅竹も舍利と翁を一体視していたことを明らかにした。さらに、南都における舍利と神の一体視の思想の生成と展開をたどった上で、禅竹の『明宿集』にみえる叡尊・翁一体説や、翁の遍在説の背景の読み直しも行った。

第六章「円満井座の御影について」。禅竹は、某年九月十三夜、住吉社に参籠し、そこで夢のお告げにより「御影」を披いたとしている。本章では、この住吉参籠譚を、『毎月抄』や『正徹物語』にみられる藤原定家が住吉明神に参籠し霊夢を受けた話の系譜の中に位置づけ、禅竹の求めで御影に関して歌を詠んでいる正徹と禅竹が共に定家の住吉参籠譚を意識していたであろうと推測した。また、禅竹は「宿神」の語義を星宿から説明しており、宿神図像である「御影」に対する禅竹の注釈にも星宿信仰がうかがえるが、それは本命思想を介して荒神信仰とも結びついていることを指摘した。

第七章「猿楽起源説の周辺と律宗」では、猿楽起源説において秦河勝が初めて猿楽を行ったとされる場が「橘の内裏」とされるのは、橘寺を内裏にしたという中世聖徳太子伝にみえる縁起説を受容したものであると論じた。また、橘寺の地に内裏があったという説は、橘寺を復興した律僧の勧進と関わることを推測し、猿楽と律宗の関わりについても考察した。

IV 「六輪一露」という表象

「六輪一露説」は、寿輪から始まり堅輪・住輪・像輪・破輪を経て空輪に至る六つの円相と、これをつなぐ一露と呼ばれる利劔の形によって、能の生成を説明した禅竹の能楽論である。ここでは、神道説、華嚴学や禅などに彩られ、能楽論としても様々な要素が詰め込まれた「六輪一露説」を構造的にとらえ直し、そのイメージ形成や背景を分析するとともに、諸要素の結びつく結節点や、荒神をめぐる思想との内的連関を明らかにした。

第八章「世阿弥から禅竹へ一禅の問題を中心に」。本章では、六輪一露説に限定的ながらも禅の影響がみえることに関連して、世阿弥、および六輪一露説に加注している東大寺戒壇院の志玉と禅との関わりを考察した。特に、世阿弥の『遊楽習道風見』が禅の影響下に一心を天下の「器」としたことを受け、禅竹が六輪一露説で寿輪を、万物を生む「器」、とした文脈について考え、世阿弥から禅竹への継承の中に禅の要素がみられる意義を論じた。

第九章「円相と利釦」では、六輪一露説特有の図形表象について考察し、像輪だけは禅の牧牛図の影響が考えられるものの、全体としては密教神道説における図形表象の影響が強いことを確認した。また、禅竹は六輪の円相を息が連続することと結びつけているが、その背景に阿字・息・音曲の命が連関する思想があることを明らかにした。

第十章「六輪一露説における志玉加注とその構造」。六輪一露説の志玉加注には仏教經典などに基づく難解句が多く、典拠不明とされてきた部分もあるが、本章では、典拠の指摘と引用意図の分析により、これを構造的に把握しようとした。特に六輪の始めの寿輪と最後の空輪に対し東大寺戒壇院の志玉が付した注は、澄観の法界思想を基礎としており、この枠組みは禅竹の構想した円環構造にも対応することを示した。

第十一章「六輪一露説と一心三観」。『六輪一露之記』他を収める金春禅竹自筆の能楽伝書に「覚大師云」として記されている、これまで典拠不明だった句が、天台宗で不動明王に関して一心三観を説く句として流通していた様相を明らかにした上で、六つの円相と釦によって構成される禅竹の能楽論体系「六輪一露説」の形態が、天台の檀那流で発展した一心三観の教説と関わることを示した。また、禅竹の翁信仰の背景にある荒神に関する教義が、この覚大師（円仁）仮託の句や、禅竹の美意識とも通底していることを論じた。

第十二章「禅竹能楽論における「一露」と華嚴学」。「六輪一露説」で重要な「一露」という概念について、主に中世神道説の影響を考えてきた定説に対し、六輪一露説に加注している東大寺戒壇院の僧・志玉の華嚴学や、禅の思想の影響も存在することを指摘した。具体的には、志玉が『華嚴五教章』の講義において言及している白露の道歌が、華嚴や禅の世界で心の自在無碍な様を示す譬えに使われており、それが禅竹の詠んだ六輪一露説に関する歌などに影響を与えていることを明らかにした。

第十三章「禅竹能楽論における「一露」と胎生学」では、同じく禅竹能楽論にみえる「一露」や「一水」という概念について、胎生学の影響を考えてみた。音の発生を身体に求める音律理論書には一部、胎生学的な言説がみられるが、禅竹も能の舞歌の発生を身体に求めて遡っていく思想の中で、音律論を媒介として胎生学の影響を受け、「一露」や「一水」という言葉を使ったであろう。これは密教的な生命観、特に「人黄」をめぐる思惟や胎内五位説などにも関わる言説であり、また荒神の胎衣神・本命神としての側面にも通じる面があることを論じた。